

〔論 文〕

フランスにおける黒人奴隷貿易・ 黒人奴隷制批判の歴史（上）

—白人を中心に—

田 戸 カンナ

はじめに

フランスの植民地において 200 年に亘って執拗に続いていた黒人奴隷制は 1848 年 4 月 27 日のデクレによって、植民地でのデクレ公布の二箇月後に全面的に廃止されることとなり、その結果、フランス領植民地でおおよそ 25 万人の黒人奴隷が解放された。このデクレの制定に至るには当然、当事者である黒人奴隷たち自身の主体的な動きがあったことは否定できない。彼らは長い歴史のなかで繰り返し反乱を起こし、白人たちを揺さぶった。しかしながら、フランスの植民地において奴隷制が全面的に禁止された背景には白人たちの長年に亘る地道な活動が確実にあった。自国の植民地において黒人奴隷貿易と黒人奴隷制が維持されていることを知ったフランスの白人たちは皆が皆それを擁護したり、黙認したり、あるいは無関心を決め込んだわけではなく、なかにはそれに果敢に立ち向かいアクションを起こした人もいた。黒人奴隷貿易と黒人奴隷制についてはこれまでその実態の解明に多くのページが割かれてきた。それに伴って、黒人奴隷制が維持されていた時代に誰が黒人奴隷貿易・黒人奴隷制批判を行ったかについても研究されてきたが、そうした研究は比較的少なく、敢えて白人という視点を強く打ち出したものはあまりない。また、テキストが十分に引用され批判の事実が証明されているとは言い難く、この観点から注目されていないテキスト及び事実も多々ある。本稿はこの研究の空白を埋めつつ、フランスでは 1848 年 4 月 27 日の奴隷制廃止決定に至るまでにはどのような白人の、どのような動きがあったのかを年代順に跡付け、奴隷制廃止決定に到達するまでの白人の功績を浮き彫りにすることを目的とする。それによって白人が黒人の自由獲得にいかに関与したかが判明するであろう。

I 18 世紀半ばから後半

イギリスの影響のもと、北米植民地では既に 17 世紀終わりに一部の白人が黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に反対の態度を表明していた。その頃の北米植民地では教会や聖書ではなく、「内なる光」に重要性を見出し、人道主義的活動に秀でた、非イギリス国教会系のプロテスタントの一派であるクエーカー教徒の一部が黒人奴隷貿易の廃止と黒人奴隷の解放を訴えていた。クエーカー教徒とはジョージ・フォックス（1624～1691）が 1652 年に創始したフレンド会のメンバーであり、フォックスは神の光は黒人のうちにも他の人々と同様にあると考え、黒人奴隷制を否定していた。ペンシルヴェニアは奴隷制廃止を願っていた領主ウィリアム・ペン（1644～1718）によって 1682 年に建設されたクエーカー派

の植民地であるが、1688年にペンシルヴェニア植民地のクエーカー教徒たちは黒人を購入すること及び所有することを告発した。北米では1700年には、多くの人が魔女として捕らえられた、マサチューセッツ植民地の町セーレムでの魔女裁判（1692年）の裁判官だったことで知られ、後世に残る日記の著者でもあるサミュエル・スーアル（1652～1730）によって、奴隷制に反対を唱えたパンフレット『ジョゼフの販売』が出版されている。『ジョゼフの販売』はアメリカで最も古い時代に出版された反奴隷制を唱えたパンフレットである。

こうした北米での動きに対してフランスでは18世紀後半になっても大西洋沿岸に住む人々と地中海沿岸に住む人々、そして植民地に輸出する物品を製造している港湾の後背地に暮らす人々以外の間では、植民地の現状や黒人奴隷貿易、黒人奴隷制はほとんど知られていなかった。しかし、1750年頃からようやく白人知識人の一部が黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を公に批判するようになった。啓蒙の世紀の賜である。といっても、モンテスキュー（1689～1755）をその先駆者であると断言することは慎まなければならない。たしかに、彼は名著『法の精神』（1748年刊）の第15編において奴隷制を考察し、これを非難している。そして、この編を根拠にしてモンテスキューは黒人奴隷制廃止論者であると主張する研究者もいる。しかしながら、ことはそれほど単純ではない。なぜならば、モンテスキューは黒人奴隷制廃止論者ではないという、正反対の説を唱える研究者も存在するからである¹。『法の精神』第15編第5章は「黒人奴隷制について」と題され、次のことばで始まっている。「もし我々が獲得した、ニグロを奴隷にする権利を擁護しなければならないとすれば、私は次のように言うだろう」（Si j'avais à soutenir le droit que nous avons eu de rendre les nègres esclaves, voici ce que je dirais²）。この引用文では従属節の動詞「avoir」が直説法半過去に、主節の動詞「dire」が条件法現在に置かれている。つまり、ここでは非現実的な仮定とそれに対して推測される結果が提示されている。モンテスキュー自身の考え、立場はそのままストレートに言い表されておらず、著者の考えについて敢えて読者の誤解を生むような語り方が採用されている。モンテスキューが黒人奴隷制をどのように考えていたのかについては安易に結論付けることはできないと言わなければならない。

これに対して、『博物誌』の著者ビュフォン（1707～1788）はフランスにおいて黒人奴隷制批判を明快に打ち出した先駆者の一人である。彼は1749年に刊行した『人間の博物誌』のなかで、現実に行われている黒人奴隷制に対して堂々と次のように述べた。「私は彼ら [=ニグロたち] の身分に同情せずに彼らの歴史を書くことはできない。彼らは隷属させられ、何も得られずに終始働かされて十分に不幸ではないのか。さらに彼らをへとへとにさせ、叩き、動物のように扱わなければならないのか。人間味というものは激しい金銭欲から生じた、こうしたむごい扱いと相容れない³。」『人間の博物誌』は出版されるや大評判になったのであるから、ビュフォンはこの書を介して黒人奴隷制を人々に知らしめ、黒人奴隷制批判の思想を広めるのに貢献したと考えられる。

18世紀半ばには哲学者エルヴェシウス（1715～1771）が黒人奴隷貿易と黒人奴隷制を公に非難した。彼は1758年に上梓した『精神論』の第1論第3章で諸国の人口について考察する際に黒人奴隷貿易に触れ、その箇所になぞらえ注を加えた。そして、その注内で奴隷貿易にあたっては多くの同国人と黒人が命を落としていると指摘し、黒人は「目的地に到着すると、主人の気紛れと貪欲さと横暴な支配力の犠牲者になる⁴」と記した。『精神論』はその思想が危険であるとみなされ、発売後間もなく禁書にされ、これは周知のように18世紀の言論弾圧の一大事件となったのであるが、エルヴェシウスは注記を活用して『精神論』の本文を言わば隠れ蓑にして黒人奴隷貿易並びに黒人奴隷制批判をこっ

そり、だが確実に行ったと言える。

同じく 18 世紀の哲学者ヴォルテール（1694～1778）に関してはまず、彼が黒人奴隷貿易に加担していたのか否かについて研究者の間で説が分かれている。ネリー・シュミットはヴォルテールがナントの貿易に投資していたと断言している⁵。これに対して、レオン＝フランソワ・オフマンはヴォルテールが黒人奴隷貿易会社の株主であったというのは作り話であり、ヴォルテールは黒人奴隷貿易から直接利益を得てはいなかったと明言している⁶。さらに、この哲学者が黒人奴隷貿易や黒人奴隷制をどのように考えていたのかについても説が一定していない。たしかに、『諸国民の風俗と精神についての試論』197 章には次のように明記されている。「我々はニグロの国でしか家内奴隷を購入しない。この交易は非難されている。自分の子供を売って利益を得る民族は買い手よりも一層非難されるべきである。この取引は我々の方が優れていることを示している。主人がいる者はひどい目に遭うべく生まれたのだ⁷。」しかし、ヴォルテールは哲学コント『カンディード』（1759 年刊）のなかで、カンディードとカカンボがスリナムの町に近付いた際に、上半身は裸で半ズボンだけ穿いた、左足と右手を失った黒人奴隷を登場させ、この黒人奴隷をして「犬と猿と鸚鵡は私たちに比べてはるかに不幸じゃありませんよ⁸」と言わしめることによって黒人奴隷に対する憐れみをかき立てたと言える。『カンディード』は出版されるや次々に版を重ね英訳とイタリア語訳が出るほど大いに売れた以上、作中の黒人奴隷に同情を寄せた読者も少なくなかったと想像される。

アンシクロペディストのシュヴァリエ・ド・ジョクール（1704～1779）もまた黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を非難し、それを公に表明した白人のうちの一人である。彼はディドロ＝ダランベール編『百科全書』のなかの多くの項目を執筆しているが、1765 年に刊行された『百科全書』第 16 巻に掲載されている「ニグロ貿易（アフリカ交易）」（TRAITE DES NEGRES, (*Commerce d'Afrique.*））の項目で次のように断言した。「奴隷にするためのこのニグロの購入は宗教、道徳、自然法そして人間のあらゆる権利を冒瀆する商売である。[……] したがって、ニグロに自由を宣言することによって直ちに解放しないのは、ニグロが運ばれてきた自由な国の判事の側の明らかな非道である。ニグロは判事のように魂を持っており、判事の同類なのだから。[……] だから、こんなに多くの人を不幸にするよりは、ヨーロッパの植民地がなくなった方がよいのだ⁹！」ジョクールはここで黒人を白人と同類とみなしつつ、黒人奴隷貿易と黒人奴隷制を徹底的に否定している。たしかに、ジョクールは『百科全書』の執筆にあたって剽窃したといって非難されているけれども、しかしだからといって彼がこのように記している事実は看過できない。

劇作家かつ劇作理論家のルイ＝セバスチヤン・メルシエ（1740～1814）ははるか未来、西暦 2400 年代の進歩して変貌を遂げたパリを描くことによって現実の悪風を批判したユートピア小説『2440 年』（1770 年刊）の第 22 章において一風変わったモニュメントを出現させている。時の権力に立ち向かったメルシエは以下のように語ることによって黒人奴隷制を公然と批判したと言えるだろう。

私はこの広場を離れようとしていた時、右手の壮麗な台座の上に一人のニグロがいるのに気が付いた。ニグロは帽子をかぶらずに片手を差し出し、誇りに満ちた眼差しを注ぎ気高く堂々としていた。その周りにはいくつもの王杖の残骸があった。ニグロの足元では「新世界の復讐者へ！」ということばが読めた。

私は驚きと喜びの声を発した。

「そうなんです」と私の興奮に匹敵する熱意を込めて相手は答えた。「自然は、この上なく残忍で、非常に長期に亘り、この上なく侮辱的な圧制から世界を解放しなければならなかったこの驚くべき人間、この不死身の人間をようやく創造したのですよ。その人間の才能、大胆さ、忍耐力、堅固さ、高潔な復讐は報われました。彼は同胞の鎖を断ち切りました。この上なくおぞましい奴隷制のもとで虐げられていたあれほど多くの奴隷はそれと同じ数の英雄を生み出すために、彼の合図だけを待っているように見えました¹⁰。[……]」

上のくだりでは、「過去」においてアメリカで黒人奴隷が「新世界の復讐者」に導かれて反乱を起こし奴隷制を崩壊させ、自由を獲得したことが暗示されている。奴隷制廃止は黒人奴隷たち自身によって力づくで成し遂げられるのである。『2440年』の校訂者レーモン・トゥルーソンによれば、『2440年』は1771年から1776年まで毎年一巻本が再版され、1785年には二巻本、1786、1787、1793、1799年には三巻本が再版されたといい¹¹、この作品は出版当時大いに売れ、フランスのみならずヨーロッパ規模の成功を収めたのであった。つまり、上の一節は少なからぬ読者が黒人奴隷制に思いをはせ、黒人奴隷制の終焉を想像するのに寄与したと考えられる。

12歳の時にマルチニーク島に赴いた経験がある作家ベルナルダン・ド・サン＝ピエール（1737～1814）はオランダ、ロシア、ポーランドなどヨーロッパ各地を旅したあと30歳の頃に、フランスの植民地を再建する任務を担った遠征隊に技術大尉として加わりマダガスカルに向けて出発したが、途上でフランス島に止まり、そこに1768年7月から1770年11月まで二年四箇月ほど滞在して黒人奴隷の生活を目の当たりにした人である。彼は帰国後の1773年に上梓した、フランス島での体験を綴った『フランス島への旅』のなかで黒人奴隷の悲惨な生活について語った。彼は「黒人について」と題された第12の手紙において黒人奴隷がどのような仕事をし、何を食べ、どのような罰を受けるのか、どのような暮らしをしているのか、逃亡した場合どのようなことになるのかなどについて自分が見聞きしたことを報告している。その上でこの手紙に「奴隷制に関する考察」と題する「追伸」を添え、そのなかで次のように述べた。

私はコーヒーと砂糖がヨーロッパの幸福に必要であるのかどうかは分からない。しかし、この二つの植物が世界の二つの部分を不幸にしたことはよく知っている。人々はこれらの植物を植える土地を獲得するためにアメリカの人口を減少させた。人々はこれらの植物を栽培する民族を獲得するためにアフリカの人口を減少させている。

我々の必需品となった物産は隣国から購入するよりも栽培する方が我々の利益になるそうだが。しかし、ヨーロッパ人の大工、屋根職人、石工、その他の職人がここで炎天下で働いているからには、なぜ人はここで白人の農夫を雇おうとしないのか！ では、現在の地主たちはどうなるのか。彼らはもっと富裕になるだろう。住人一人は二〇人の農夫がいれば金銭的にゆとりがあるだろう。住人一人は二〇人の奴隷を所有して貧しいのである¹²。

ベルナルダンが真に黒人奴隷制の廃止を望んでいたのか否かについては研究者によって見解が分かれるところであるが、上のくだりを読むと、彼は少なくとも現状の黒人奴隷制に批判的であったと言えるだろう。そもそもベルナルダン自身が作品冒頭で述べるところによれば、彼が『フランス島への旅』を刊行した目的の一つは不幸な黒人奴隷たちに鞭の一撃を免じることであった¹³。『フランス島

への旅』は出版当時ほとんど売れなかった。しかし、黒人奴隷制の実態をその目で直に見た人間の証言並びに主張には説得力があったに違いない。

たしかにイヴ・ベノによれば、歴史家であり哲学者のアベ・レーナル（1713～1796）は金儲けへの関心が高い人物であり、奴隷貿易に投資していたという¹⁴。そして植民地主義糾弾の書とされている、彼が編纂した大著『両インドにおけるヨーロッパ人の植民及び商業の哲学的・政治的歴史』、通称『両インド史』（1770年刊）はディドロ（1713～1784）、ドルバック男爵（1723～1789）、ペシュメジャ（1741～1785）らによって執筆されており、内容上の矛盾も指摘される。しかし、レーナルはこの著作の決定版とみなされている1780年版において、黒人奴隷が反乱を起こして植民地を混乱に陥れるのを避けるために黒人奴隷の境遇を改善し奴隷制を徐々に廃止する必要があると説いた。1780年版『両インド史』は1781年3月頃に配給されると、人民の蜂起をけしかけているとの理由で同年5月25日にパリ高等法院によって禁書にされ、レーナルには身柄拘束と財産没収の判決が下った。レーナルは運よく事前に情報を得てベルギーに逃れたのだが、この断罪が奏功し、『両インド史』は既に1774年の改訂増補版も成功していたが、1780年版も大きな成功を収めた。1780年版はイヴ・ベノによると1781年から1787年にかけて抜粋版を除いて17回再版されたという¹⁵。レーナルはこの書を通じて1780年代に多くの人に黒人奴隷制廃止を訴えたことになる。『両インド史』のなかのディドロが執筆した箇所を読むと、ディドロもまた黒人奴隷制に反対していたことが分かる。次に引用する『両インド史』1780年版の一節は、ディドロが版の改訂にあたって補筆したことが判明している箇所である¹⁶。「なぜ[……]情勢が不安定であるにもかかわらず、自由な人間という慰めになる名誉ある名称まで拒否され、その名称を獲得する希望まで奪われる不幸な人種がいなければならないのだろうか。いいや。それについて人が何を言うことができようと、これらの不幸な人間の境遇は私たちの境遇と同じではない¹⁷。」

数学者であり政治家のコンドルセ（1743～1794）は同性愛者や娼婦の人権について考えるなど、自由、平等、人権に敏感な思想家でもあった。彼はまた、アメリカ独立宣言の起草者トマス・ジェファソン（1743～1826）と、ジェファソンの草案に手を加えたベンジャミン・フランクリン（1706～1790）の知り合いであった。たしかに、ジェファソンとフランクリンは二人とも黒人奴隷を所有していたし、ジェファソンの黒人奴隷制に対する態度には矛盾がある。しかし、フランクリンは黒人は白人よりも知能の面で劣っているとは考えておらず、1787年には奴隷制廃止を目指すペンシルヴェニアの協会の会長に就任しており、ジェファソンは奴隷制を嫌悪し、黒人奴隷の境遇改善を願ったことを忘れてはならない。コンドルセは後述するイギリスの廃止運動にも通じており、18世紀終わりに黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する書き物をいくつも世の中に発表した。そのなかで最も重要で最も知られているのは『^{ニグロ}黒人奴隷制に関する考察』である。この著作は「シュワルツ氏」（m. Schwartz）——«t»の文字のない«Schwarz»はドイツ語で「黒色」を意味する——のペンネームで1781年に刊行された。黒人奴隷制そのものを主題にして真正面から扱い、掘り下げて考察し否定した書物の出現である。コンドルセはこの書のなかで黒人奴隷制擁護派の説を次々に論破しながら植民地の経済問題及び行政改革、奴隷の労働条件などについて考察し、人間を売買し奴隷にすることは犯罪であるとの見解を明確に打ち出した。それに加えて、自由を解していない黒人奴隷にすぐさま自由を与えるのは危険であるため、黒人奴隷制を段階的に廃止していくよう主張した。この著作は初版出版後にも反響を呼んだが、1788年に第2版が出版されると、一層大きな反響を呼んだ。第2版はフランス領ギアナ総督を務め、

植民者の立場を熱烈に支持していたピエール・ヴィクトル・マルエ（1740～1814）による『^{ニグロ}黒人奴隷制に関する意見書』（1788年刊）などの反論を引き起こしたものの、コンドルセの思想に共感した読者も少なからずいたと考えられる。

1776年7月4日のアメリカ独立宣言、それに伴って自由や平等や人権といった概念が勝利したことを背景に、アベ・レーナルの1780年版『両インド史』が配給され、コンドルセの『^{ニグロ}黒人奴隷制に関する考察』初版が出版された1781年以降は、白人たちが黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に対する批判を強めていった。1789年、1790年、1791年には黒人奴隷貿易や黒人奴隷制を批判する書き物が立て続けに世に送り出された。1789年にはコンドルセが^{バンフレ}攻撃文書『サン＝ドマングのプランター議員を国民議会に認めることについて』を、奴隷制はキリスト教の教えに反すると考えるプロテスタントの神学者でリヨンの牧師バンジャマン＝シジスモン・フロサル（1754～1830）が『正義と宗教と政治の裁きに持ち込まれた^{ニグロ}黒人奴隷とギニアの住民の利益』を、セバスチャン＝アンドレ・シビール（1757～182?）が『黒人奴隷売買上流階級』を、人権を擁護していたプロワの司教で政治家のアベ・グレゴワール（1750～1831）が小冊子『サン＝ドマングとアメリカの他のフランス領の島の有色人や混血のための、国民議会に宛てた意見書』を、ギニア、^{ニグリティア}ニグリティアを訪れアフリカに長期滞在したアントワヌ＝エドム・プリュノー・ド・ボムゴルジュ（1720～1812）が『^{ニグリティア}ニグリティアの描写』を世に出した。1790年にはアベ・グレゴワールが小冊子『サン＝ドマングとアメリカの他のフランス領の島の有色人の不幸と権利と要求に関する、人道主義者への手紙』を、女性劇作家オランプ・ド・グージュ（1748～1793）が『アメリカ擁護者への返事』を公表した。1791年にはプリソ・ド・ヴァルヴィル（1754～1793）が小冊子『黒人貿易と奴隷制の擁護者ルイ＝マルト・グイの最初で最後の手紙への反論』を、アベ・グレゴワールが小冊子『サン＝ドマングとアメリカの他のフランス領の島の有色市民と自由^{ニグロ}黒人への手紙』を相次いで発表したという具合である。フロサルは1784年にイギリスに赴き、そこで黒人奴隷解放の言論に接して、黒人奴隷解放を要求する人たちと交流するようになったのだが、帰国後に発表した前掲の著作はフランスで大評判になった。憲法制定国民議会議員並びに国民公會議員でもあったアベ・グレゴワールは生涯を通じて黒人奴隷問題に取り組んだ人物である。

「黒人の友協会」

18世紀終わりの、白人による黒人奴隷貿易批判や黒人奴隷制批判の動きのなかで特筆すべきは「黒人の友協会」の設立とその活動である。

イギリスでは奴隷解放を望んだフィラデルフィアのクエーカー教徒アンソニー・ベネゼット（1713～1784）が執筆した『ギニア史記』（1771年刊）が反響呼んだ。また、ロンドンで逃亡するも主人に捕まり奴隷として売られそうになっていた黒人ジェームズ・サマーセットの釈放を命じた、マンスフィールド卿による判決（1772年）や、1781年に132人の黒人奴隷が奴隷船から生きたまま海に投げ捨てられ、保険金をめぐる裁判となったゾング号事件¹⁸が一般に知られた。このため、1780年代のイギリスではフランスよりも白人による黒人奴隷貿易批判や黒人奴隷制批判が活発であった。1783年にはアメリカに生まれイギリスに渡って来たクエーカー教徒ウィリアム・ディルウィン（1743～1824）が奴隷貿易反対を訴える組織を二つ発足させた¹⁹。また、1784年には、小アンチル諸島に属するセント・キッツ島に聖職者として長期滞在してプランテーションで黒人奴隷の改宗にあたったイギリス国教会牧師ジェームズ・ラムジー（1733～1789）が小冊子『英領砂糖植民地におけるアフリカ人奴隷の処遇』

と改宗についてのエッセイ』を刊行して奴隷制の実態を暴き、これを廃止するべきであると主張した。この主張は奴隷制擁護派の怒りを買いつつも人々に注目された。さらに、自由と平等を標榜するフランスの啓蒙思想家たちの影響も受けて、ロンドンでは1787年に奴隷貿易廃止協会がウィリアム・ディルウィン、ジェームズ・フィリップス（1745～1799）を含むクエーカー教徒9名²⁰と、トマス・クラークソン（1760～1846）、グランヴィル・シャープ（1735～1813）を含む国教会福音主義派3名を合わせた12名によって設立され、同年5月22日に第一回目の会合が開かれた。グランヴィル・シャープはサマーセット事件でサマーセットの味方になり、ゾング号事件ではゾング号の船員を殺人罪で告発しようとした人である。この奴隷貿易廃止協会は黒人奴隷が置かれている境遇を広く大衆に知らせ、奴隷貿易を廃止することを目的に小冊子やポスター、パンフレットを印刷し、講演会を主催し、署名を集めていった。併せて、これらの活動を展開するために寄付を募った。今日、ジロンド党の指導者として知られ、社会の不平等に反対していたブリソ・ド・ヴァルヴィルは陰謀に巻き込まれたため1787年にロンドンに逃げた折に、この奴隷貿易廃止協会の活動を知った。彼はこの協会のメンバーからフランスでも同様の協会を設立するよう促され、フランスに戻ると、翌1788年2月19日にパリのフランセーズ通りにあった自宅で「黒人の友協会」を設立した。この協会は黒人奴隷貿易廃止を訴えるフランス史上初の組織である。設立時のメンバーにはブリソの他にミラボー伯爵、シエイエス、ラ・ファイエット侯爵らが名を連ね、ジュネーヴの銀行家エチエンヌ・クラヴィエール（1735～1793）が初代会長として選出された。この会にはほどなくコンドルセが加わり、パンジャマン・シジスモン・フロサル、ラ・ロッシュフーコー公爵、アベ・グレゴワール、ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベールらが次々に入会した²¹。会員のなかでも途中から会長となったコンドルセは会の規約や議会への請願書を執筆するなど重要な役割を果たした。ブリソは「黒人の友協会」が設立されて間もなく、黒人奴隷を解放する方法を模索することを目的の一つとしてわざわざアメリカ合衆国に足を運んだ。彼は1788年6月3日にル・アーヴル港を出航し、7月24日にボストンに着いてから同年12月3日にアメリカを発つまでのおよそ四箇月のアメリカ合衆国滞在中にパリの「黒人の友協会」と似たような複数のアメリカの協会と接触し、また、黒人が白人よりも劣っていないことを証明するために黒人について研究した。ワシントンに会った際には奴隷制廃止の方法を準備するよう、この近い未来の大統領に促した。

浜忠雄氏によれば、現在見ることができる「黒人の友協会」の名簿は1789年のもの二点と、1790年のものと推定される一点の計三点である²²。1789年の名簿のうちの一点を見ると、そこには「会長」としてコンドルセの名前が、「事務局員」としてグラマニャックの名前が、「会計係」としてプレバンの名前が記されており、「委員会メンバー」としてブリソをはじめ16名の名前が記載されている。そのあと入会順に、職業や住所が添えられた会員名が1番から94番まで列記され、最後に「外国人準会員」として1名の名前が付け加えられている²³。この名簿によれば、1789年のある時点で正会員は94名いたことになる。もう一つ、1790年のものと考えられる名簿を見ると、そこには1番から99番まで職業や住所とともに会員名が刻まれており、さらに「外国人準会員」として5名、「国内通信準会員」として8名の名前が記されている。だが、この名簿をよく見ると、番号の61は二つ存在するため、この時点で正会員は実際にはちょうど100名を数えたことになる²⁴。「外国人準会員」と「国内通信準会員」を合わせると、名簿に掲載された人数は1789年から1790年にかけて18名増加したことになる。しかし、実際のメンバーはさらに多いようで、1789年の会議に少なくとも一度は出席

した会員は174人に上るといふ²⁵。

「黒人の友協会」はそもそも設立それ自体がイギリスの影響下にあるが、それ以外の点でもイギリスの影響を大きく受けていた。手足に鎖を付けられひざまずき手を合わせ「私はあなたの同胞ではないでしょうか？」(NE SUIS-JE PAS TON FRERE?)と切々と訴える黒人奴隷をモチーフにした、「黒人の友協会」の刻印(図1参照)にしてからが、同じ姿勢で「私は人間そして同胞ではないでしょうか？」(AM I NOT A MAN AND A BROTHER?)と叫ぶ黒人奴隷をモチーフにした、ウェッジウッド社製のメダリオン(図2参照)を真似たものであった。陶芸家ジョサイア・ウェッジウッド(1730~1795)が彫刻家ハック・ウッドの手を借りて製作したこのメダリオンはロンドンの奴隷貿易廃止協会の印として用いられ、大衆の目を引いていた。ジョサイア・ウェッジウッドは陶芸界に革新的技法をもたらしたウェッジウッド社の創立者として知られるが、ロンドンの奴隷貿易廃止協会に入会した奴隷制廃止論者でもあった。ロンドンの奴隷貿易廃止協会は「黒人の友協会」に資料を提供したり、補助金を支給したり、奴隷貿易廃止を呼びかける書き物をフランス語に翻訳してフランスで広めたりするなど協力を惜しまなかった。トマス・クラークソンはフランスで運動を推進するために「黒人の友協会」設立の際にパリに来て助言を与え、「黒人の友協会」のメンバーと頻繁に手紙をやり取りした。

「黒人の友協会」は設立当初は黒人奴隷貿易と黒人奴隷制の両方の廃止を唱えたが、その後、黒人奴隷制廃止は一旦棚上げして、まずは黒人奴隷貿易を廃止するよう提唱した。それは黒人奴隷制そのものを廃止するよりも黒人奴隷貿易を廃止する方が容易であり、黒人奴隷貿易が消滅すればそれに伴って黒人奴隷制も自然に消えてなくなると考えていたからである。それに、当時の廃止論者たちの間には黒人奴隷制を廃止したならば植民地への打撃が大きいし、黒人奴隷たちはまだ自由を理解しておらず、自由を享受できないという考えが広まっていた。「黒人の友協会」は庶民ではなく、知的かつ社会的エリートの集団であり²⁶、書き物を通して一般大衆に訴えもしたが、その主な活動は議会に働きかけることだった。協会は1790年2月5日に会長ブリソ・ド・ヴァルヴィル、事務局員ル・パージュの署名入りの『黒人貿易廃止のための、国民議会への請願』を印刷した。そこには「黒人を直ちに解放することは植民地にとって致命的な行為となるだけでなく、貪欲なゆえに屈辱と無能の状態にある黒人にとって不吉なプレゼントにさえなるだろう。[……]我々は一言で言えば、貿易の廃止を要求するものである²⁷」と明記されており、その後、黒人奴隷貿易は無益であることがその根拠とともに述べられている。浜忠雄氏によると、ルイ＝セバスチヤン・メルシエは「黒人の友協会」の会員であっ



図1 「黒人の友協会」の刻印



図2 ウェッジウッド社製のメダリオン
(ロンドンの奴隷貿易廃止協会の印)

ウェッジウッド博物館 <https://histoire-image.org/etudes/cachet-societe-amis-noirs> (2022年6月22日閲覧)

たというのが²⁸、メルシエは大革命直前のパリの様子を活写した『タブロー・ド・パリ』（12巻本、1782年～1788年）のなかでこの協会について以下のように記すのを忘れてはいない。「ロンドンの人道主義協会を手本にした人道主義協会が今日、我々が（福音書を読んでいるにもかかわらず）コーヒーを飲み砂糖を食する喜びのために犠牲にしたあの種の人間たちを、奴隷制とそれに伴う不幸から救い出そうと尽力している²⁹。」

先に述べたように、「黒人の友協会」が設立されたのは1788年2月19日のことである。周知の通り、それから一年半経たないうちにフランス革命が勃発する。大革命が進行すると、会員らは革命の騒乱に巻き込まれていった。ブリソとコンドルセがジロンド党の指導者であることが示すように、「黒人の友協会」はジロンド党に結び付いていたのだが、1791年秋には会合を開かなくなった。そして「黒人の友協会」はいつかははっきりと分からないが、消滅していった。中心メンバーのブリソは1793年10月31日に処刑され、クラヴィエールは1793年に、続いてコンドルセは1794年に自死した。ブリソは数々の理由で告訴されたのだが、その一つは「黒人の友協会」を創設したことであった。

「黒人の友協会」は活動期間中に総じて大きな政治的成果を上げることはなかった。1789年8月26日に憲法制定国民議会で採択された『人および市民の権利宣言』、いわゆる『人権宣言』を読んでもそこには黒人奴隷について触れられていない。1791年5月15日に憲法制定国民議会は定められた条件を満たしていれば自由人の両親から生まれる有色人に政治的権利を与えるデクレを制定したが、このデクレは奴隷制を擁護する白人たちの反発を招き、結局、わずか四箇月後の1791年9月24日に破棄されてしまった³⁰。1791年8月にフランスの植民地サン＝ドマングで黒人奴隷が蜂起したのを受けて、1792年3月28日には全ての有色自由人に参政権を与えることが議会で可決されるが、これは「黒人の友協会」の例外的な政治的成果であると考えられている。「黒人の友協会」の会員全員が熱心に活動したわけではなかったし、他方で「黒人の友協会」には「マシヤック・クラブ」というプランテーション経営者などから成る集団が立ちはだかつてもいた。1789年8月20日にナントやボルドー、マルセイユ在住のプランテーション経営者と植民地貿易関係者たちは新しい活動を模索するためにコック＝エロン通りの館に集い、「フランス植民者通信協会」を形成した。その数日後にヴィクトワール広場にあったマシヤック侯爵ことルイ・クロード・ルネ・ド・モルダン（1746～1806）——彼はサン＝ドマングに砂糖プランテーションを所有していた——の館を拠点にした「マシヤック・クラブ」が誕生し、1792年まで書き物を印刷するなど、黒人奴隷制を維持し白人入植者の利益を守るための活動を展開した。クラブのメンバーにはマルチニーク生まれでサン＝ドマングで暮らしたことのある法律家メデリック・ルイ・エリー・モロー・ド・サン＝メリー（1750～1819）、サン＝ドマングに莫大な財産を所有していたグイ・ダルシ侯爵（1753～1794）らがいた。先に言及したピエール・ヴィクトル・マルエもマシヤック・クラブの一員であった。クラブのメンバーは最初の会合では68名を数え、3年の間に少なくとも一回会合に参加したのは361名に上る³¹。単純に参加メンバー数だけを見ると、この集団は「黒人の友協会」よりも規模が大きかったと言える。しかしだからといって、この時期に「黒人の友協会」が存在し、白人が具体的に活動し、大きくはないものの成果を上げたことは黒人奴隷制廃止への道筋で見過ごすべきではない。

「黒人の友協会」が消滅したあと、1792年から数年間、白人メンバーが中心となって廃止運動を牽引する協会は存在しなかった。しかし、1797年には「黒人と植民地の友協会」が結成され、この新しい協会はアベ・グレゴワール、バンジャマン・シジスモン・フロサール、経済学者ジャン＝バチス

ト・セイ、レジェ・フェリシテ・ソントナクス（1763～1813）、フランソワ・ラントナら 100 名近い会員を擁した。協会の名称それ自体が示しているように、この協会は「黒人の友協会」とは異なって、植民地の有効利用と拡大を目指すものだった。だが、会員のなかでも活発に活動する者はほとんどおらず、奴隷制を擁護するロビー活動に押され、「黒人と植民地の友協会」は 1799 年にあえなく消滅した。

（つづく）

注

- 1 以下参照。市川慎一「十八世紀前半の奴隷制批判——ジョークールの『百科全書』項目を中心として——」『Études françaises』n° 2, 1995 年, p. 6-10.
- 2 Montesquieu, *De l'Esprit des lois*, t. I, éd. Laurent Versini, Folio, 1995, p. 472. (邦訳は引用者による。以下同様。)
- 3 Buffon, *Histoire naturelle de l'homme*, dans *Œuvres*, éd. Stéphane Schmitt et Cédric Crémère, Bibliothèque de la Pléiade, 2007, p. 369.
- 4 Claude-Adrien Helvétius, *De l'esprit*, éd. Jacques Moutaux, Fayard, 1988, p. 37.
- 5 Nelly Schmidt, *L'abolition de l'esclavage : cinq siècles de combat (XVI^e-XX^e siècle)*, Fayard, 2005, p. 71.
- 6 Léon-François Haffmann, *Le Nègre romantique : personnage littéraire et obsession collective*, Payot, 1973, p. 72.
- 7 Voltaire, *Essai sur les mœurs et l'esprit des nations*, t. VIII, éd. Bruno Bernard, John Renwick, Nicholas Cronk, Janet Godden, dans *Les Œuvres complètes de Voltaire*, t. XXVIC, Voltaire Foundation, 2015, p. 322.
- 8 Voltaire, *Candide*, éd. René Pomeau, dans *Les Œuvres complètes de Voltaire*, t. XLVIII, The Voltaire Foundation, 1980, p. 196.
- 9 *Compact edition Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, t. III, Readex Microprint Corporation, 1969, p. 859-860.
- 10 Louis-Sébastien Mercier, *L'An deux mille quatre cent quarante*, éd. Raymond Trousson, Ducros, 1971, p. 204-205.
- 11 Raymond Trousson, Introduction, *ibid.*, p. 71.
- 12 Bernardin de Saint-Pierre, *Voyage à l'île de France*, éd. Yves Bénot, La Découverte/Maspero, 1983, p. 121.
- 13 *Ibid.*, p. 26.
- 14 Yves Bénot, *Diderot, de l'athéisme à l'anticolonialisme*, François Maspero, 1981, p. 160.
- 15 Yves Bénot, Avertissement, dans Guillaume Raynal, *Histoire philosophique et politique des deux Indes*, François Maspero, 1981, p. 7.
- 16 Yves Bénot, *Diderot, de l'athéisme à l'anticolonialisme, op. cit.*, p. 211.
- 17 Guillaume-Thomas Raynal, *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, t. III, J.-L. Pellet, 1780, p. 200.
- 18 ゾング号事件については以下参照。児島秀樹「英国奴隷貿易廃止の物語（その2）」『明星大学経済学研究紀要』Vol. 39, N° 2, 2008 年 3 月, p. 107-110.
- 19 以下参照。藤川沙海「18 世紀末イギリス奴隷貿易廃止の正当化　クエーカー教徒の主張から」『バプリック・ヒストリー』第 14 号, 2017 年, p. 37.
- 20 18 世紀半ばまでは黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に反対するクエーカー教徒は少数であったが、18 世紀半ば以降、北米植民地とイギリスの両地域において黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に反対するクエーカー教徒が増えていった。これは人道主義的意識の浸透とともに、奴隷貿易や奴隷所有によって富を蓄え、教えにそぐわないクエーカー教徒が多数出現したことと関わる。この点については以下参照。布留川正博『奴隷船の世界史』岩波新

書, 2019 年, p. 119-122.

- 21 ソフィー・ムセはオランブ・ド・グーージュも「黒人の友協会」の会員であったと述べている。Sophie Mousset, « Contre toute forme d'oppression », dans Olympe de Gouges, *Zamore et Mirza*, Libro, 2007, p. 12.
- 22 浜忠雄『ハイチ革命とフランス革命』北海道大学図書刊行会, 1998 年, p. 68.
- 23 *Tableau des Membres de la Société des amis des Noirs. Année 1789*, dans *La Révolution française et l'abolition de l'esclavage*, t. VI, EDHIS, 1968, p. (1)-(8).
- 24 Eloise Ellery, *Brissot de Warville : A Study in the History of the French Revolution*, Burt Franklin, 1970, p. 442-447.
- 25 Erick Noël, *Être noir en France au XVIII^e siècle*, Tallandier, 2006, p. 166.
- 26 エリック・ノエルは注 25 で示した箇所に続けて、「黒人の友協会」の会議に出席した人々の社会的身分と職業を分析している。
- 27 *Adresse à l'Assemblée Nationale, pour l'abolition de la Traite de Noirs*, dans *La Révolution française et l'abolition de l'esclavage*, t. VII. p. (3)-(4).
- 28 浜忠雄『ハイチ革命とフランス革命』, p. 68-69.
- 29 Louis-Sébastien Mercier, *Tableau de Paris*, t. II, éd. Jean-Claude Bonnet, Mercure de France, 1994, p. 1235.
- 30 1791 年 5 月 15 日のデクレの制定そして破棄に至る経緯については以下参照。浜忠雄『カリブからの問い
ハイチ革命と近代世界』岩波書店, 2003 年, p. 84-95 : 浜忠雄『ハイチ革命とフランス革命』p. 85-99.
- 31 Erick Noël, *op. cit.*, p. 169.

(たど かな 全学共通教育センター)